

1. 企画展示の内容

- 開催期間：2024年7月20日（土）～2024年9月23日（月・祝）
- 開催場所：萩博物館 企画展示室・人と自然の展示室
- 入場者数：44,812人



会場となった萩博物館の外観



本展の会場入口

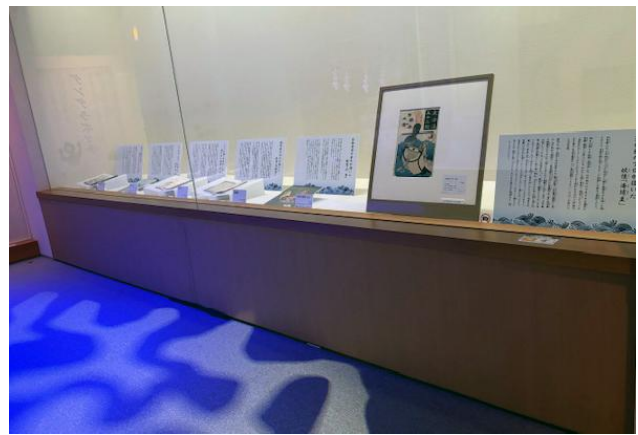


・海の妖怪にまつわる昔の人々の念がこもった資料や事象を扱う本展が安全無事に開催されることを願い、当館の展示会の開幕式としては初めて、地域の神社の禰宜を招いてお祓いを行った。

・会場の構成は、当館のこれまでの夏期特別展が採用してきたストーリー仕立てを踏襲。今回のストーリーは、日本各地から地元・萩の沿岸や沖合の妖怪に遭遇しながら、妖怪を生み出すカギとなる「秘密の印」（＝昔の人々がもっていた「海への畏怖の念」）を見つけ、そのパワーで現代の海に起こっている異変を解決するという展開とした。会場内はこのストーリーに沿って迷路状とし、照明や音声を駆使した雰囲気づくりを施し、子供達が主体的に探検・探究することを促した。

・これらを通じ、来場した子供達が受動的にならず、主人公となって能動的に「海」の世界に分け入り、海の妖怪とそれにまつわる自然や文化を体験・体感できる環境づくりができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



- ・会場では登場する妖怪ごとに特徴や伝承を記したグラフィックを掲出。一般には類似する伝承を統合・編集して展示することが多いが、本展では、なるべく妖怪ごとに数十～数百もの個々の伝承をそのまま表示した。来場者アンケートには読み切れなかったとの声もあったが、内容を読んでもらうこと以上に、おびたしい数の伝承に囲まれることで、日本人がこれほどにも海に怪異を見出してきたことに感嘆させる効果を目指した。
- ・三重県志摩地方の海女が「共潜（トモカツキ）」から身を守るおまじないの印を描いて身に付けてきたイソテヌグイ（鳥羽市立海の博物館蔵）、妖怪「ダンダラボッチ」を撃退すべく編み出されたという三重県波切の「大わらじ」（志摩市歴史民俗資料館蔵）など、今なお息づいている海の妖怪文化に関する資料のほか、『東海道五十三対 桑名 海坊主』（山口県立萩美術館・浦上記念館蔵）など海の妖怪が実際にビジュアル化されたことを示す資料も展示。
- ・こうしたグラフィックや資料を通じ、昔の日本人が海と共に生き、人智を超えた現象に遭うと恐怖や不安を抱いて妖怪を想像・創造してきたことを実感してもらうことができた。



- ・会場内の所々では、陰陽師が邪気を祓うため呪術として行っていた特殊な足の踏み方「反閉」を体験しながら歩く通路、「船幽霊」から逃れるため来場者が底の抜けた柄杓をもって歩く通路、海辺に佇む女性の絵のそばを通ると「磯女」「濡女」などの妖怪に変化して見えるレンチキュラーパネル、デジタル映像の「影鰐」の影が徘徊する床、崖に「タキワロ」が現れ働きかけるデジタル映像など、見るだけでなく体験・体感できる仕掛けを施した。
- ・会場内では、上述のように妖怪を生み出すカギとなる「秘密の印」を探していくストーリー展開に沿い、4つの「秘密の印」のスタンプをクイズと共に設置し、来場者が正解の印を考え選んでスタンプシート（お札）に押印しながら巡ることができるようにした。
- ・こうした仕掛けや工夫により、人々は観覧するだけでなく、考えたり体験・体感したりしながら能動的に本展のコンテンツやメッセージに触れることができたと思われる。底の抜けた柄杓を「船幽霊」に渡す体験コーナーは、SNS 上で 100 万リーチを得るほどの話題になったり、超自然現象の専門雑誌で紹介されたりと、当館としては前例にない反響があった。



- ・会場の後半では、本展のストーリーのクライマックスとして、江戸時代後期に豊作と疫病を予言したという「予言獣」の様々な絵図（複写）を展示。その代表格「アマビエ」は、日本の「人魚」のモデルや吉凶の前兆とされる珍魚リュウグウノツカイの出現がモチーフとなって想像・創造された可能性を絵図・標本・剥製を用いて紹介。この魚は現代の萩にも継続して出没し続けており、人々が「海への畏怖の念」を抱く源が今も存在し続けていることを伝えた。
- ・会場の末尾では、本展のストーリーのエピローグ映像を投影しつつ、現代の萩の海に現れている多数の珍魚・怪魚や環境異変の標本・写真などを一堂に展示。ここで見て感じたことをモチーフに妖怪を創造してもらおう「海の妖怪創作コンクール」（下記参照）へリンクした。
- ・会場のメイン部分で妖怪を通じて昔の人にあった「海への畏怖の念」に気づいてもらった後、現代の親子にそれを芽生えさせ、海との未来を考える本展の主旨につなげることができたと考えられる。

【来館者の声】

- 海に対する「おそれ」（畏怖の念）は親が子供に教えたくとも伝え方が分からなかったが、本展で妖怪を切り口に感じ取らせることができ、よい教育になった。
- 人々が興味をもちやすい「海の妖怪」というもつテーマで一貫させつつ、最後には海的环境への警鐘が鳴らされるという導線が自然に構成されており、公立博物館の展示会の意義を感じることができた。
- 本展を観覧したことをきっかけに、「人間が海を大切にしなければ妖怪が増えてしまう」と子供なりに解釈をし、海的环境に意識をもつようになった。
- 昔の人々には海に対する不安や畏怖の念があったことを認識できたので、現代に生きる自分達も自発的に海や自然に向き合ったり感じたりしたいと思った。

2. 関連事業の内容

■海の妖怪創作コンクール

【開催日時】 募集期間：2024年7月20日（土）～8月25日（日）

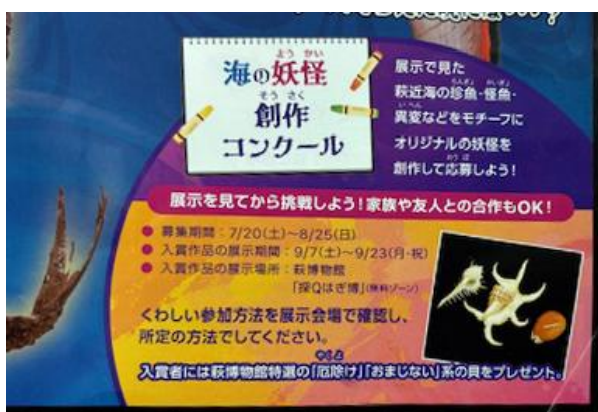
展示期間：2024年9月7日（土）～10月31日（木）

【開催場所】 募集：本展会場 展示：萩博物館「探Qはぎ博」

【参加者数】 応募件数：109件

【実施内容・目的】

- 本展会場の末尾で現代の萩の海に現れている珍魚・怪魚・異変の展示などを見て感じたことをモチーフに、人々に伝えたい「教訓」「いましめ」をこめて自分なりに妖怪を創造して描いてもらい、応募してもらった。
- 本展で妖怪を通じて昔の人の「海への畏怖の念」に気づいてもらうだけでなく、現代の人々に少しでもそれを芽生えさせることを目指した。



本展チラシにおける当行事の告知



本展の会場出口での当行事の案内表示



- ・この企画は本展を観覧した後にオプションとして取り組むことができるよう、チラシの中間にて本展のコンテンツやストーリーと関連づける形で掲載して告知。また、チラシを見なくてもこの行事に気づくことができるよう、展示会場の出口にもパネルを掲出して告知。
- ・前年度の事前事業として萩光塩学院高等学校が萩の海の環境異変をモチーフに制作した妖怪画も会場出口に掲出し、当行事の挑戦者の参考にしてもらった（写真左下）。
- ・結果として109件もの作品の応募があった。それらを山口県立美術館の福田善子普及課長に見ていただき、連携して作品の評価や入賞作品の選定を行うことができた（写真右下）。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



- ・審査を終えた109点の作品は、9月7日（土）～10月31日（木）にかけ、萩博物館内「探Qはぎ博」（無料ゾーン）で展示した。
- ・109作品のうち、優秀賞1作品と特別賞9作品は、別途、同室のメインとなる黒板に特別に掲示すると共に、各々について審査結果（講評）も表示した（写真右）。
- ・これらの展示のほか、受賞者に入賞の旨を伝えると共に賞品を贈呈したことで、受賞者やその関係者の再来場を促すことができた。また、それ以外の人々もこの展示を見ることで、現代人に芽生えた「海への畏怖の念」を間接的に感じることもできたと思われる。



- ・優秀賞に選ばれた「蒼炎毒蛇」は、萩の寺院に「大蛇の頭」として伝わるサメの頭のミイラをモチーフに、海坊主や平家蟹など古来の海の妖怪を圧倒しつつ海洋ゴミをエネルギーに旋風を巻き起こして人々を戒める大蛇の妖怪を描いた小学生の作品（写真左）。
- ・ほかの作品も同室内のパーティションに全て掲示（写真右）。いずれも人物、生物、魔物などを自在に改造して海の世界環境異変を伝えたり警告したりする設定がなされた力作であった。
- ・総じて、多くの人々が本展で昔の人々が海を人智を超えた存在と見なしていたことを知り、現代の海の世界環境異変も目の当たりにし、それらをモチーフに妖怪を創造したことで、程度の差はあれ「海への畏怖の念」を芽生えさせたことがうかがえた。

■海の妖怪をさがせ！@萩・明倫学舎

【開催日時】2024年7月20日（土）～9月23日（月・祝）

【開催場所】萩・明倫学舎

【参加者数】推定約1400人

【実施内容・目的】

- 萩市中心部の観光施設である萩・明倫学舎のあちこちに本展に登場する妖怪のサインを目立たないよう掲示。それを探し回ってもらい、サインのQRにアクセスするとスマホ画面に拡張現実（AR）の妖怪が出現し、好みのポーズや背景で記念撮影を撮ることができるようにした。
- 萩博物館の本展への関心を高めたり、本展とセットで1日ばかりでの萩への来訪を促進したり、本展の混雑を回避したりする効果を期待した。



開催場所となった萩・明倫学舎

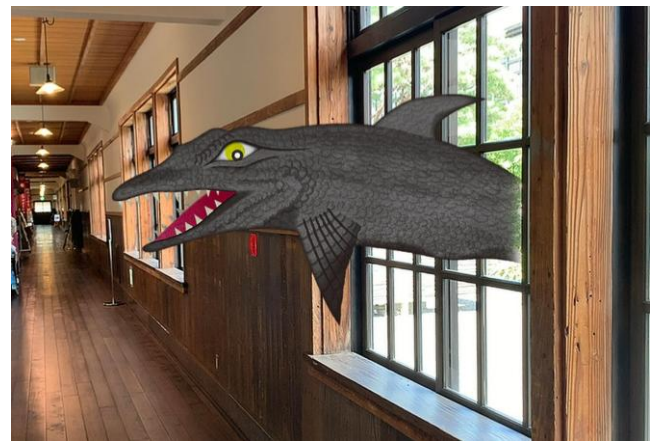


開催場所に設置した当行事の案内看板



- ・萩・明倫学舎は旧小学校を活用した萩市の観光拠点であると共に市内の子供達がよく訪れる場所で、萩博物館から徒歩で10分、車で数分という至近距離にあり、駐車料金も萩博物館と共通となっている。この施設と連携することで、様々なプラス効果が期待された。
- ・当企画を本展チラシ裏面に併載すると共に、萩・明倫学舎に案内看板を掲出することで、萩博物館で開催中の本展会場との間で多くの人々を還流させる効果もあったと思われる。
- ・学舎の校長室（写真左下）、廊下、来賓室、敷地内の諸施設に当行事の主旨や参加方法を記したA4サインと、本展に登場する妖怪のうち9種類のシルエットを目立たないよう掲出。
- ・参加者は、A4サイズのサインに記されたマニュアルに沿い、妖怪のシルエットにスマホをかざすことで、AR（拡張現実）を体験できるようにした。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等ではできません。



- 妖怪のシルエットにスマホをかざすと、上記イメージのようにスマホ画面の中に容姿や表情が復元された妖怪がAR（拡張現実）で現れる。例えば、「海女（ウミオンナ）」は窓からこちらを覗いているかのように（写真左）、「鰐鰯」は窓から手前に突進してくるかのように（写真右）、参加者の心情や心理に働きかけてくるように映されるようになっている。
- 広い学舎内を探し回ってもらうことで、すぐに終わって飽きられることなく、一定時間をかけ能動的に、本展に登場する妖怪とのリアルな対面を体験させることができたと思われる。



- スマホに写った妖怪は、好みのポーズや背景と共に記念撮影を撮ることができるようにもした。さらに、各自で画像をInstagramで「#海の妖怪をさがせ」をつけて投稿すると、独創的な投稿をした人へ本展の関連グッズを贈呈した。
- 個人情報の関係のためかInstagramに投稿された画像は25点と少なかったが、当行事そのものには推定約1400人の参加があり、関心の高さがうかがえた。
- 総じて、本展と関連させながらデジタル技術を使って海の妖怪に親しんでもらいつつ、それらの性質・性格や教訓・いましめを認識してもらうことができたと考えられる。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■タカラガイでおまじないストラップをつくろう

【開催日時】2024年7月26日（金）10:00～12:00、13:30～16:30

【開催場所】萩博物館 講座室・体験学習室

【参加者数】132名

【実施内容・目的】

- 本展に関連し、昔から厄よけやお守りとして使われたり、幸運や開運を招くといわれたりしてきたタカラガイと、暗闇で光る蓄光ビーズなどを組合わせてオリジナルストラップを作るワークショップを行った。
- 本展と連動し、日本のみならず世界の人々が海の様々な事象に対して特別な念を抱き、それが今も続く文化として継承されていることを実感してもらった。



開催場所の萩博物館の講座室



講座室で準備をするスタッフ



- ・巻貝のなかまであるタカラガイは、過去の当館行事において人気があったため、今回も参加者が多いことを想定し、当館で最大の部屋の講座室と体験学習室を連結して会場を用意。本展のチラシ裏面やホームページで告知し、事前予約制ではなく当日受付（ただし整理券配布）で対応した。会場のホワイトボードにはタカラガイの分類や生態、厄よけ・お守りとしての文化についての解説を記し、参加者が随時読むことができるようにした（写真右上）。
- ・タカラガイ・紐・ビーズは数種類用意し、受付後に参加者が選ぶことができるようにした。
- ・総じて、参加者が海の「貝」をめぐる文化を意識しながら自分だけの作品作りを楽しむことができたことで、海の生物と文化への興味付けと体験・体感を促すことができたと考えられる。



- ・定刻 30 分前から参加希望者に整理券を配り、一定の時間・人数が体験できるようにした。
- ・会場には案内や補助をするスタッフを配置したが、参加者が自力でも制作体験できるよう、作り方のマニュアルも用意し、各テーブルに配置した（写真左）。
- ・参加者それぞれが好きなタカラガイや材料を選んでオリジナル性の高いアイテムを制作。
- ・総じて、参加者は快適な環境の中で、自分の好みや感性に合わせ、事後に残る自分だけのアイテムを作ることができ、楽しみながら海の自然や文化に向き合う好機となった。



- ・会場内のスタッフとして、萩博物館の職員のほか、NPO 萩まちじゅう博物館の自然おたから班ほか有志を配置し、参加者への説明や制作の補助を行った。
- ・実施中、家族やきょうだいで制作に熱中する姿が多々見られた。本展の観覧と当行事への参加をセットで旅程を立てて来館した人や、同日に当行事を複数回実施した人も見られた。
- ・総じて、多くの人々に人気があり受け入れられやすいタカラガイを切り口に、積極的な参加と能動的な体験を促すことができた上、厄よけ・お守りといった形で古来の人々が海の事象に特別な念を抱いてきたことを認識・体感してもらう好機になった。

【来館者の声】

- きれいな貝がおまじないなどの文化につながっていることを知ることができた。
- この行事を通じ、海の貝のことや文化のことがどんどん分かり、勉強になった。
- きれいな貝でストラップ作りを体験した上で展示も観覧したことで、海をきれいにするための活動に参加したいと思うようになった。

■ウニで魔除けランタンをつくろう

【開催日時】2024年8月19日（月）10:00~12:00、13:30~16:30

【開催場所】萩博物館 講座室・体験学習室

【参加者数】218名

【実施内容・目的】

- 本展の主旨に間接的に関わるものとして、鋭いトゲをもち、魔よけ効果が期待されるウニの殻をビーチグラスなどで飾ってLEDライトスタンドに固着し、妖しく光るオリジナルランタンを作るワークショップを行った。
- この行事はたいへん人気を博し、本展と連動して、海の不思議な生物が人々の想像をたくましくさせ、特別な思いや文化を生み出す源になりうることを実感してもらおうことができたと考えられる。



本展チラシ裏面における告知



開催場所の萩博物館の講座室とスタッフ



- ・ウニそのものが魔よけに使われた事例は確認できていない。しかし、萩市ではマツカサウオやダラノキなどトゲのあるものが魔よけとして玄関に飾られたりする文化があることから着想し、トゲをもち海洋生物の代表格であるウニの殻に、おなじみに使われる清明桔梗を連想するヒトデや妖しく発光する台座をあしらって魔よけアイテムを創造してもらった機会とした。当行事は本展のチラシ裏面やホームページへ、本展に関する他の情報と併催して告知。
- ・NPO 萩まちじゅう博物館の自然おたから班や有志（写真右上）のほか博物館実習生（写真左下）にも事前に制作方法をマスターしてもらい、参加者の案内・補助に臨んでもらった。
- ・地味なイメージのあるウニを題材とした行事ではあったが、早期から多くの親子の間で話題を呼び、今後も海洋生物をモチーフにモノづくり体験をする道筋ができた。



- ・前述のタカラガイを使った行事と同様、参加希望者には整理券を渡し、一定の時間・人数が体験できるようにした。午前の部は満員、午後の部も半分以上が埋まるほどの盛況となった。
- ・前述のタカラガイ行事を凌ぐ218名もの参加があり、これまでの当館の行事としては屈指の人気を博し、夏休み中の親子が自分なりに発想を膨らませながら海洋生物を使って事後に残る自分だけのアイテムを作る貴重な機会を創出することができたと思われる。



- ・会場では、博物館職員の総括のもと、参加者への個別の案内・補助はNPO 萩まちじゅう博物館の自然おたから班や有志（写真左）、高校生コミュニケーター（写真右）が対応。
- ・参加者は、家族やきょうだいで制作に没頭する姿が多々見られた。また、ここで制作した作品を学校の夏休みの宿題として提出した子供もいた。
- ・総じて、自由な発想でモノづくりを楽しみながら、海の生物や体のパーツに想像を働かせて意味付けをする実体験を通じ、それが昔の日本人が行ってきた海のモノ・コトに対する特別な思いや文化を生み出す源になりうることを認識してもらうことができたと思われる。

【来館者の声】

- 海には魚やウニやシーグラスなどいろいろなものがあり、いろいろな発想でいろいろなものを作ることができることを知った。
- 昔から人々は海のものに対していろいろな想像をしてきたことを知ることができた。
- この行事だけでなく本展も観覧したことで、海を守りたいという気持ちになった。

■ザ・シェリング・バー 厄よけ・おまじない編

【開催日時】2024年9月9日（月）～9月20日（金）の平日のみ

【開催場所】萩博物館 探Q はぎ博

【参加者数】推定約 120 名

【実施内容・目的】

- 萩博物館に常設されていた体験コーナー「ザ・シェリング・バー」を、本展にちなんだ特別バージョンとして、厄よけ・おまじないに使われる貝を探して持ち帰り、各自でアクセサリーや標本にすることができるようにして提供した。
- 人々が海に対して特別な念を抱いて文化を築いてきたことを、身近な海岸の生物やモノを通じて親しみながら実感してもらうことができた。



本展ホームページにおける告知



このコーナーを設置した「探Q はぎ博」



・従来から当館の「探Qはぎ博」（無料ゾーン）では、室内に設置したカウンター型什器に萩近海の貝殻を多数用意し、来場者に好きなものを探して持ち帰ってもらうことのできる「ザ・シェリング・バー」を設置していた。これを、本展の主旨にちなみ、厄よけ・おまじないに使われてきた貝を題材としたバージョンにして提供。

・混雑を避けて本展とあわせてゆっくり体験してもらえよう、本展の会期中でも混雑しやすい時期を避け、夏休み後の9月上旬から開始し、萩博物館ホームページで告知した。

・「ザ・シェリング・バー」自体が従来から人気のあったこともあり、正確な数値は不明ながら推定約 120 名の利用があり、海の自然と文化に親しむ契機になったと考えられる。



- ・カウンター型什器の上に設置したタイトル看板は、本展のメインビジュアルを踏襲しつつ、従来の「ザ・シェリング・バー」と同様の方法で貝を探ることができるよう表示（写真右）。
- ・什器上には、選んだ貝をこぼさず持ち帰るための小袋やセロハンテープも用意。
- ・当館の無料ゾーンに設置したため、本展のみならず常設展や、当館そのものの利用者が気軽に立ち寄る姿が見られた。様々なターゲット層の人々が海の文化を切り口に貝を手にとったり選んだりすることを通じ、本展の内容や地域の海への興味付けにもなったと思われる。



- ・実際に手に取ることでできる貝の種類としては、軟体部の一部からとれる液で布に海の妖怪を避けるおまじないの印を描いて干すと落ちにくい紫色になるとして三重県などで使われてきたレイシガイ（写真左）、千葉県で地蔵に捧げると耳の病気を避けられると言い伝えられるオオヘビガイ（写真右）など。いずれも種類を識別するための写真と解説を掲出。
- ・総じて、萩の身近な海辺の貝殻を自由に手に取ってもらいつつ、日本各地で昔から人々が貝に厄よけやおまじないなど特別な意味をもたせてきた文化に親しみながら体験・体感してもらう好機になったと考えられる。

【来館者の声】

- 萩の貝殻を楽しみながら、昔の人がそれらに託してきた思いを知ることができた。
- 貝の形・色・大きさと、表示されたいわれを比べながら読むことで、昔の人々の貝に対する発想や想像に思いをはせることができた。
- ここで手に入れた貝を使い、家でおまじないのインテリア作りをしたいと思った。

■現代の妖怪！？珍魚・怪魚標本タッチング

【開催日時】2024年9月16日（月・祝）・9月23日（月・祝）
10:00～15:00

【開催場所】萩博物館 講座室・体験学習室

【参加者数】計858名（1日目：496名、2日目：362名）

【実施内容・目的】

- 本展の内容に関連し、昔から妖怪や怪異の現れや前触れではないかと考えられることのあるサメや珍魚・怪魚などを萩市内の定置網の協力を得て入手し、解凍標本として室内で公開した。
- 解凍標本を触ったり持ち上げたりしてもらうことで、海洋生物の特徴と、海に生きる人々が紡いできた文化の関わりへの興味や理解を高揚した。



本展ホームページにおける告知



本行事を告知するための白黒チラシ



- ・当館では例年、夏期特別展の会期末頃にまだ来場していない人々を誘ったり、すでに来場した人々にも違う観点やきっかけで再来場してもらったりして本展のメッセージを受け取ってもらうべく、「フィナーレ企画」を実施することが多い。本展においても、フィナーレを飾るにふさわしいテーマとして、この行事を考案した。
- ・以前より当館は萩市北東部の江崎定置網の協力を得て海洋生物の標本収集をしてきたため、そのネットワークを活用し、同定置網にかかって取り置きされていた魚類を当行事のために提供してもらい、前日から当館に持ち込んで解凍し、当日公開した。
- ・萩博物館ホームページのほか、白黒の簡易チラシ（写真右上）も近隣市町の小学校等に配布したところ人気を博し、2日間それぞれ当館の行事としては最大規模となる来場があった。



- ・実施にあたっては、事前予約なしで直接会場に来てもらい、待合スペースで待機してもらい、メイン会場の空き具合に応じて数組ずつ招き入れ、絶えず 20~30 人が快適に体験できるよう工夫。会場内のホワイトボードには各魚種の特徴や文化などのトピックスを表示した。
- ・当館職員のほか、NPO 萩まちじゅう博物館の有志、水産大学校学生、山口県立大の非常勤講師が案内やタッチングの補助、質問に対する対応を行った。
- ・来場者は思い思いに海洋生物に触れ、興味に応じて好きなだけ魚種にまつわる文化について解説を受けたり質問したりすることができた。



- ・海水温上昇によって近年増加しつつある危険生物・ハマダツ（写真右）などは特に人気を博し、多くの親子が熱心に観察したり触ったりする姿が見られた。
- ・総じて、この行事は本展のフィナーレを飾る形で、本展に登場した妖怪や怪異に関する伝承や現代の海に生じている環境異変を、近海でとれたホンモノ・ナマの海洋生物を通じて多くの親子に実感してもらい、本展が伝えようとする展示メッセージを受け止め考えてもらう好機になったと考えられる。

【来館者の声】

- 本物のエイやサメに触ることができ、その歯や皮膚の構造や特徴が分かった。
- 萩の海には実にいろいろな種類の生物がおり、それらのために海をきれいに守らなければならないと思った。
- 海の生きものが怪異だけでなく着物のデザインなどの着想にもつながったことなど話を聞くことができて興味深かった。

■クイズ式ワークシート 海の妖怪からの挑戦状

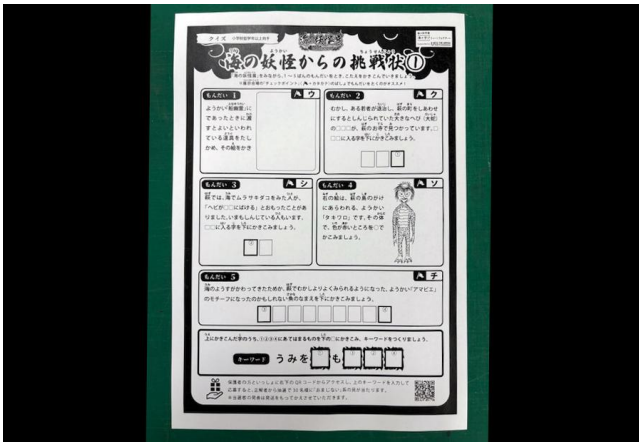
【開催日時】2024年9月9日（月）～9月20日（金）の平日のみ

【開催場所】萩博物館 企画展示室・人と自然の展示室

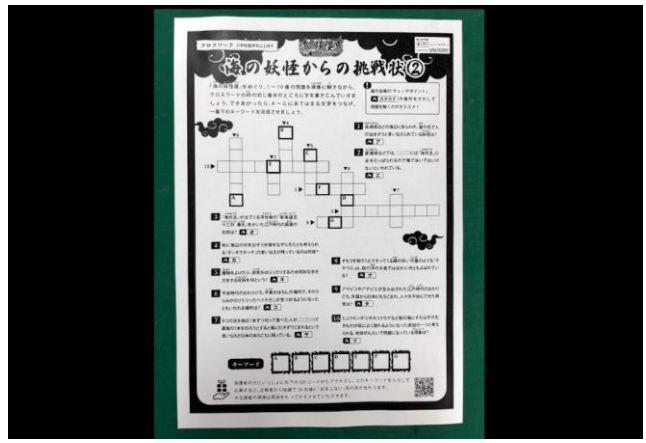
【参加者数】33名（一般来場者：20名、学校利用：13名）

【実施内容・目的】

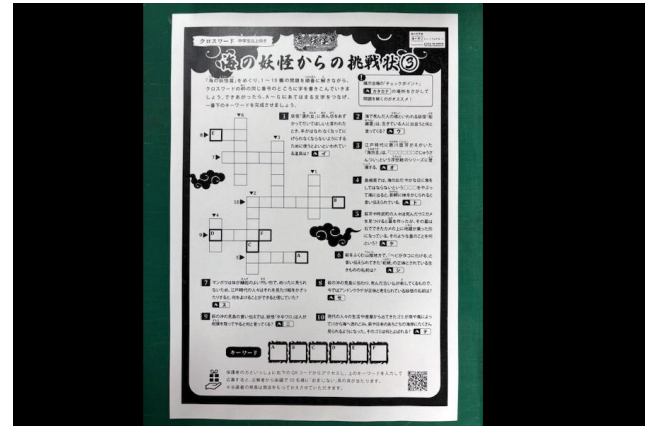
- 本展の内容・メッセージ・ポイントに関するクイズ式ワークシートを3種類作り、一般来場者が自由に取り組んで応募してもらい、正解者に賞品を贈呈。地域の高校の授業（地学基礎講座）でも活用した。
- 本展を観覧しただけでは関心や理解が及びにくい内容についても楽しみながら解き明かして認識する好機となった上、展示会を学校の理科授業や探究学習などにも活用できる技法の開拓につながった。



低難易度のワークシート



中～高難易度のワークシート（写真上・下）



- ・ワークシートは、小学校低学年から大人まで幅広い層による利用が想定されたため、設問が少なく絵解きを盛り込んだ低難易度の1種類（写真左上）、解説パネルと展示資料を見ながら思考する中～高難易度の2種類（写真右上・右下）の計3種類ほど制作した。
- ・一般来場者は計20名が好きなシートを会場入口でとって挑戦して正解を果たし、賞品の贈呈を受けた。その他、萩市の萩光塩学院高等学校の授業（地学基礎講座）の一環として、高校3年生13名を対象に、事前に趣旨をレクチャーした上で（写真左下）、郷土の海の環境異変を学んでもらうための媒体としても活用した。
- ・単に観覧しただけではポイントを逃したり解説を読み飛ばしたりする可能性があるところ、それを補足しつつ本展の主旨である「海への畏怖の念」に気づいてもらう一助になった。



- ・ 萩光塩学院高等学校の授業では、中～高難易度のクロスワード式ワークシート2種類をグループによって割り振り、グループごとに会場内を巡りながら取り組んでもらった。
- ・ 会場前半では、高校生達は妖異な照明や雰囲気や戦慄しつつ、日本各地の海の妖怪や怪異、それにまつわる教訓や意義について、ワークシートを通じて解き明かしてもらった。
- ・ 高校生の中にはすでに本展を自身で見に来たという生徒もいたが、改めてこの授業にてワークシートに本展のポイントへ誘導されることで、本展の主旨である「海への畏怖の念」をより強く認識することができたと思われる。



- ・ 本展の会場の末尾で現代の萩の海の環境異変を展示しているエリアでは、高校生達は郷土の海に現実起こっている海洋ゴミ問題、熱帯性の海洋生物の出現、藻場の衰退などを、クロスワード式ワークシートを通じ、回答につながる事象を探したり考えたりしてもらった。
- ・ 総じて、海の妖怪や怪異に込められた教訓やいましめ、現代の海の環境異変の実態に関する理解を促進し、海の未来を考える好機になったと思われる。高校生達はこの授業の1ヵ月後に地元の海岸に出かけて熱帯性貝類を探して海洋環境を考察する授業も行い、展示会を軸に学校の理科授業や探究学習に展開していくためのモデルケース作りができた。

【来館者の声】

- クロスワード式であったため、楽しみながら海の生物や妖怪の謎を解くことができた。
- 海の妖怪は人々を怖がらせるだけでなく、教訓や戒めを伝えようとしていることが分かった。
- 展示を自分で見ただけでは気づけなかった海の文化にまつわる要素やメッセージにも関心が行き届き、勉強になった。

【事業全体のまとめ】

■コロナ禍によるターゲット層の流出や他行事・施設との競合によってプレゼンスが低迷気味であった萩博物館において、開館20周年を機に、親子に訴求しやすいテーマであり、かつ自然系・人文系をあわせもつ総合博物館として取り組むことのできる「海の妖怪展」を開催した。

■展示会の構成やコンテンツは、鳥羽市立海の博物館や水産大学校ほかの3者と連携することにより、現代人が失いかけている「海への畏怖の念」に気づかせるストーリーのもと、意義のある資料の観覧と体験・体感型の仕掛けを取り入れて実現。また、会場の末尾では現代の海に生じている環境異変の実態が分かる展示も行った。付帯事業については、山口県立美術館や萩光塩学院高等学校などの6者との連携により、本展で見たモノ・コトをモチーフに妖怪を創作してもらう「海の妖怪創作コンクール」など7種類を実施。

■本展には萩市の人口を超える44,812人の来場が、付帯事業には2,800人以上の参加があった。来場者や参加者からは、海の様々なモノ・コトを介して昔の人々の海に対する思いや文化に触れることができた、子供達に伝えるのが難しい「海への畏怖の念」を教える好機になった、妖怪に海の環境を守ることの必要性を教えられたといった声が聞かれた。総じて、海の妖怪や怪異に込められた教訓やいましめを知り、環境異変が生じている現代、海とどのようにつきあうべきかを考える好機になったと思われる。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産大学校水産学研究所 若林敏江教授	展示資料（ムラサキダコ乾燥標本・特記的生物標本）の制作、関連行事を担う大学生の派遣
2. 国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産大学校食品化学科 和田律子教授	展示資料（ムラサキダコ乾燥標本）の制作
3. 山口県立美術館 福田善子普及課長	関連行事（「海の妖怪創作コンクール」）の実施方法の考案、応募作品の審査
4. 萩光塩学院高等学校 都志見有稀教諭	関連行事（クイズ式ワークシート「海の妖怪からの挑戦状」）の実施方法の考案および学校授業での活用
5. 山口県立大学 上利英之非常勤講師	展示資料（妖怪関係の絵図・情報）の準備・制作、展示物（特記的海洋生物標本など）の設置
6. 鳥羽市立海の博物館 縣拓也学芸員	展示全体および関連行事の手法・技術・情報の提供
7. 萩・明倫学舎推進課 服部哲也課長	関連行事（「海の妖怪をさがせ！@萩・明倫学舎」）の調整・準備・実施・運営
8. 特定非営利活動法人 NPO 萩まちじゅう博物館 自然おたから班	関連行事（「タカラガイでおまじないストラップをつくろう」等）の実施・運営
9. 萩市ビジネスチャレンジサポートセンター はぎビズ 獅子野美沙子所長	各種関連行事の企画・実施、広報宣伝方法に関する論議

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 山口新聞	「萩博物館開館20周年記念特別展『海の妖怪展～百鬼夜航のミステリー～』」、7月20日（土） ほか
2. 毎日新聞	「海の妖怪展～百鬼夜航のミステリー～」、8月17日（土）

3. 読売新聞	「『海の妖怪』紹介 萩博物館 モデル生物など」、8月30日（金） ほか
4. KRY 山口放送（テレビCM）	「海の妖怪展・告知」編、7月6日（土）～8月11日（日） ほか
5. tys テレビ山口（テレビ番組）	「情報番組 mix」、7月25日（木） ほか
6. yab 山口朝日放送（アナウンサー原稿読み）	「ナビテレ」、7月17日（木） ほか
7. Instagram（SNS 広告）	テレビ CM 同様のコンテンツ配信、7月21日（日）～9月22日（日） ほか
8. TVer（広告）	テレビ CM 同様のコンテンツ配信、7月6日（土）～9月22日（日） ほか

以上

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等ではできません。